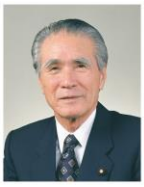
第三百三十一話　戦後〇十年総理談話

大東亜戦争終結から80年の節目も目睫の間にある。「戦後50年総理談話」以降、10年毎の節目に総理談話（「総理の談話」ではない。閣議決定された国家としての正式な見解）を発出するのが慣例化している。国家としての歴史観を表明する意義はあるのだが、ともすればそれは諸刃の刃となりかねない。村山、小泉、そして安倍の総理談話を管見する。



１　各総理談話の特色等

（１）経緯

国会決議よりも踏み込んだ内容の総理談話を出したい村山総理の意を受けて外政審議室長が案文を作成した。これより以前、戦後５０年の国会決議は、異論百出・紛糾し、本来の全会一致を得られずに可決された。当然、参議院での国会決議は見送られた。そのような経緯のあった中での総理談話であり、不意打ちだったとも。何れにしろ、爾来歴代内閣は、村山談話を踏襲するのか否かを厳しく問われることとなった。村山談話をそのまま踏襲している訳ではないと答弁した安倍首相は、相当な決意・覚悟と周到な準備をもって安倍談話の発出に漕ぎつけた。

（２）村山談話（1995年　戦後50年　約１，３００字）

自社さ連立政権の首班、社会党の村山富市氏が発表した談話で、初の公式見解であるとされる。４つの重要なキーワード（植民地支配　侵略　痛切な反省　お詫び）が盛り込まれている。爾来歴代内閣の踏み絵となり、屡日本非難の根拠となった感がある。本談話は、戦前全体を否定しており、村山首相の個人的歴史観が濃く、且つ、具体性に乏しく、十分且つ幅広い事前検討が為されたとは言えないとの批判が強い。

（３）小泉談話（2005年　戦後60年　約１，０００字）

村山談話を踏襲しているが、特に、「中国や韓国」の国名を挙げて謝罪したことが特色だ。郵政解散とダブり、内容的に新味なく、インパクトはなかった。

（４）安倍談話（2015年　戦後70年　約３，０００字）

村山談話を全体として引き継いでいるとされるが、4 つのキーワードについてはやや一般論的表現になったとも言われている。有識者会議「二十一世紀構想懇談会」等での活発な論議を経て、関係国等にも周到・注意深く説明・理解を得たうえでの発出となったことは流石である。村山、小泉談話とはその重みが違う。読売、日経は好意的、朝日が最も批判的、毎日と産経は違う立場から更にイデオロギー色をと求めた。具体的で、マクロな歴史観を呈示すると共に、謝罪を引きずることを止めるべきとの思いを強く滲ませている。戦後のわが国の貢献や立ち位置を明確にし、未来志向的である。云わば、戦後談話の完成形に近いのではないか？

２　戦後80年（等）談話について

（１）10 年毎に発出する是非は？　安倍談話を最終形とするのか否か？それを超える談話だとすれば、次は何を訴えるかが問われる。

（２）先の大戦に関する日本としての総括がまず前提であるべきだ。

歴史は相対的だし、一方的な断罪はなかるべしと思料する。往時の行動を現代の常識で批判することの是非をどう考えるべきか？日本としての正史の確立が課題だ。

（３）所謂隣国条項的な配慮の必要性は？未だに払拭し得ない謂われなき誹謗中傷に対する明確な態度が必要だ。事実をもってきちんとけじめをつけるべきだ。

以上の点を克服し得てこその先の大戦の決着であり、もはや戦後ではない証左となる。そこに日本再生の鍵があると思えるのだが、どうだろうか？

（了）